

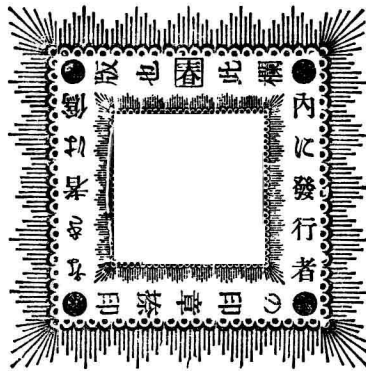


金色夾叉

中
編

明治三十一年十二月廿九日印刷
同 三十二年一月一日發行

版權所有



著者 紅葉山人

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田篤太郎

東京市日本橋區兜町二番地

印刷者 星野諤次郎

東京市日本橋區通四丁目角

發行所 春陽堂

電話本局五拾壹番

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社

金色夜叉

實價金四拾錢

中篇 金色夜叉

紅葉

(壹)

新橋停車場の、大時計は四時を過ること二分餘、東海道行の列車は既に客車の扉を鎖して機關車に烟を噴せつゝ、三十餘輛を聯ねて蜿蜒として横りたるが、眞承の秋の日影に夕榮して、窓々の硝子は燃えんとすばかりに耀けり。驛夫は右往左往に奔走して、早くくと喚くを餘所に、大踏歩の寛々たる老歐羅巴人は麥酒樽を竊みたるやうに腹突出して、桃色の服着たる十七八の娘の日本の繪日傘の柄に橙色のリボンを飾りたるを小脇にせると推並び、れのれが乗物の顔して急ぐ氣色も無く過る後より、蚤取眼になりて遅れじと所體頼して駈來る女房の嵩高なる風呂敷包を抱くが上に、四歳ほどの子を背負ひ

たるが、何處どこの扉とびらも鎖さしたるに狼狽うろたふるを、車掌しゃしやうに強曳しやうびかれて漸おそく安堵あんぞせる間も無く、青洩あせな垂たる女の子を率ひきゐて、五十餘の老夫の是も戸惑とまどひして往ゆきつ復もどりつせし揚句あげく驛夫いきふに曳ひかれて室内しつないに押入おしれられ、如何いかなる罪つみやあらげなく閉たてらるゝ扉とびらに袂たもとを介はさまれて、もしくと救すくを呼よぶなど、未だ都みやこを離はなれざるにはや旅たびの哀あはれを見るべし。

五人一隊いつたひの若わかき紳士等しんしらは中等室ちゆうしやうの片隅かたすみに圓居まどろして、其中に旅行りきらしき手荷物てにものつを控ひかへたるは一人よりあらず、他は皆横濱迄よこはままでとも見ゆる扮装いでたちにて、紋付もんつきの裕羽織あはせはたけを着きたるもあれば、精縷せいろうの背廣せひろなるもあり、袴はかま着きけたるが一人、大島紬おほしまつゆの長羽織ながはたけと差向さむかひへる人のみ、フロッコートを着きて、待合所まちあひしよにて受けし餞別せんべつの瓶びん函はこなどを網棚あみだなの上に片附かたつけて、其手を摩拂すりばらひつゝ窓より首くびを出いして、停車場ステーションの方かたをば、求もとむるものありげに望見のぞみたりしが、

旋て藍の如き晚霽の空を仰ぎて、

「不思議に好い天氣に成つたなあ。此分なら大丈夫じや。」

「今晚雨になるのも又一興だよ、ね、甘糟。」

黒餅に立澤瀉の黒紬の羽織着たるが、慥く言ひて示す所あるが如き微笑を洩せり。甘糟と呼ばれたるは茶柳條の仙臺平の袴を着けたる、此中にて獨り頬鬚の嚴しきを蓄ふる紳士なり。

甘糟の答ふるに先ちて、背廣の風早は若きに似合はぬ皺噺聲を振擽りて、

「甘糟は一興で、君は望む所なのだらう。」

「馬鹿言へ。甘糟の痒きに堪へんことを僕は丁と洞察して居るのだ。」

「これは憚様です。」

大島紬の紳士は粘着いたるやうに靠れたりし身を遽に起し

て、

「風早君と僕はね、今日は實際犠牲に供されて居るのだよ。佐分利と甘糟は夙て横濱を主張して居るのだ、何でも此間遊仙窟を見出して來たのだ。うれで我々を引張つて行つて、大いに氣焔を吐く意なのさ。」

「何じやい、何じやい！ 君達が此の二人に犠牲に供されたといふなら僕は四人の爲に賣られたんじや。其には及ばんと云ふのに、是非濱迄見送ると言うで、氣の毒なと思つて居つたら、僕を送るのを名として君達は………怪しからん事たず。學生中から其の方は勉強しをつた君達の事ぢやから、今後は實に想遣らるゝねえ、肩書を辱めん限は遣るも可からうけれど、注意はしたまへよ、本當に。」

此の老實の言を作すは、今は四年の昔間貫一が兄事せし同窓

の荒尾讓介なりけり。彼は去年法學士を授けられ、次いで内務省試補に擧げられ、踰えて一年の今日愛知縣の參事官に榮轉して赴任の途に上れるなり。其の齡と深慮と誠實との故を以つて、彼は他の同學の先輩として推服する所たり。

「これで僕も諸君へ意見の言納じや願くは君達も宜く自重してくれたまへ。」

面白く發りし一座も忽ち白けて、頻に燻らす卷簾の煙の急駛せる車の逆風に扇らるゝが飛雲の如く窓を逸れて六郷川を掠むるあるのみ。

佐分利は幾數回頷きて、

「いや然う言れると慄然とするよ、實は嚮停車場で例の美人クリム(箇は美人の高利貸を戲稱せるなり)を見掛けたのだ。那の聲で蜥蜴啖ふかと思ふね、毎見ても美しいには驚嘆する全

で淑女の扮装だ就中今日は治して居つたが、何處か旨い口でもあると見ねる那奴に搾られちや克はん、那が本當の眞綿で首だらう。」

「見たかつたね、うれは夙て御高名は聞及んで居る。」

と大島紬の猶續けんとするを遮りて、甘糟の言へる、

「れ、寶井が退學を吃つたのも、其奴が債權者の重なる者だと云ふぢやないか。餘程好い女ださうだね、黄金の腕環なんぞ嵌めて居ると云ふぢやないか。酷い奴な！鬼神の松だ。佐分利は其の劇なを知りながら係つたのは、大いに冒險の目的があつて存するのだらうけれど、木伊乃にならんやうに禪を緊めて掛るが可いぜ。」

「誰か其奴には尻押か有るのだらう。亭主が有るのか、或は情夫か、何か有るのだらう。」

皺しわ頃がれ聲こゑは卒つ然ぜんとして此この間まを發はつせるなり。

「其に就ついては小説せうせつ的てきの閱ブイフ歴れきがあるのさ。情い夫ろぢやない亭主ていしゅがある、此こ奴やつが君われ我々われの一世いっせい紀き前ぜんに鳴ならした高利貸アイヌで、赤あか橙がし權ごん三郎と云いつては、いや無む法ぽうな強かう慾よくで、加くふるに大々たいく的てき娼物いんぶつを來きて居ゐるのだ。」

「成程なるほど！積極しやくきよくと消極せうきよくと相觸あひふれたので爪つめに火ひが焔もる譯わけだな。」

大島紬つぎが得意どくいの謠浪うたかへしに、深沈しんちんなる荒尾あらなも已やむを得えざらんやうに破顔はがんしつ。

「うの赤橙かじきんと云いふ奴やつは貸金かきんの督促どそくを利用りしては女めを弄もぶのが道樂だうらくで、此こ奴やつの爲ために汚けがされた者は隨分ずぶん意外いぐわいの邊へんにも在あるさうな。うこで今の美人びじんクリイム、是も其の手に罹かつたので、原もとは貧びん乏士族ほしぞくの娘むすめで堅氣かたぎであつたのだが、老猾わやち此娘こむすめを見ると食指しよくし大いに動うごいた譯わけで、之これを俘とりこにしたさに父親ちちやに少ち許りの金かねを貸かし

たのだ期限が來ても返へせん、其を何とも言はずに、後から
 〳と三四度も貸して置いて、もう好い時分に、内に手が無く
 て困るから、半月ばかり仲働に貸してくれと言出した。是は縦
 んば奴の胸中が見え透いて居たからとて、勢ひ辭りかぬる人
 情だらう。今から六年ばかり前の事で、娘が十九の年、老猾は六
 十約の禿顚の事だから、まさかに色氣とは想はんわね。因で内
 へ引張つて來て口説いたのだ。女房といふ者は無いので、怪し
 げな龔妾然たる女を置いて居つたのだが、其内にいつか娘は
 妾同様になつたのは奈何だい！

固唾を嚙みたりし荒尾は思ふ所ありげに打顔きて、

「女といふ者は那樣ものじやて。」

甘糟は其の面を振仰ぎつゝ、

「驚いたね、君にして此言あるのは、荒尾が女を解釋せうとは思

はなんだ」

「何爲かい。」

佐分利の話を進む折から、汽車は遽に速度を加へぬ。

大「聞はんく、もつと大きな聲で。」

風「さあ、御順に膝繰だ。」

佐「荒尾、あの葡萄酒を抜かんか、喉が渴いた。これからが佳境に入るのだからね。」

甘「中錢があるのは酷い。」

佐「蒲田君は好い葺を吃つて居るぢやないか、一本頂戴。」

甘「いや、圖に乗ること僕は手廻の物を片附けやう。」

佐「甘糟燂兒を持つて居るか。」

「うら、れ出だ。持参いたして居りまする仕合で。」

佐分利は居長高になりて、

「些と點けてくれ。」

葡萄酒の紅を啜り、ハバナの紫を吹きて、佐分利は徐に語を繼ぐ、

所謂一朵の梨花海棠を壓してからに、娘の満枝は自由にされて了つた譯だ。是は無論親父には内證だつたのだが當座は存つて歸りたがつた娘が、後には親父の方から歸れ〜言つても、歸らんだらう。其内に段々様子が知れた者で、侍形氣の親父は非常な立腹だ。子でない、親でない、と云ふ騷になつたね。すると禿の方から妾だから不承知なのだ。だらう、籍を入れて本妻に直すから與れろといふ談判になつた。うれで逢つて見ると娘も阿父さん何か承知して下さいは親父益す意外の益す不服だ。けれども天魔に魅入られたものと親父も愛相を盡して、唯一人の娘を阿父さん彼自身より十歳約も老漢の高利貸に與

れて了つたのだ。それから満枝は益す禿の寵を得て、内政を自由にするやうになつたから、定めて生家の方へ貢ぐと思ふの外、極の給の外は塵葉一本饋らん。是が又禿の御意に入つた處で、女め熟ら高利の鹽梅を見て居る内に、いつか此の商賣が面白くなつて來て、此の身代我物と考へて見ると、一人の親父よりは金錢の方が大事、といふ不敵な了簡が出た譯だね。」

「驚くべきものじゃね。」

荒尾は可忌しげに呟きて、稍不快の色を動せり。

因で敏捷な女には違無い、自然と高利の呼吸を吞込んで、後には手の足りん時には禿の代理をして、何處へでも出掛けるやうになつたのは益す驚くべきものだらう。丁度一昨年邊から禿は中氣が出て未だに動けない。ういつを大小便の世話までして、女の手一つで盛に商賣をして居るのだ。うれで、其の前年

かに親父は死んだのださうだが板の間に薄縁を一枚敷いて、其の上で往生したと云ふくらゐの始末だ。病氣の出る前などは陸に寄せ付けなんださうだがな、殘刻と云つても、何云ふのだか餘り氣が知れんぢやないかな——然し事實だ、で、禿は其の通の病人だから、今では那の女が獨で腕を揮つて益々盛に遣つて居る。是則ら美人クリム」の名ある所以さ。

年紀かい、二十五だと聞いたが、然う漸う二三とよりは見えんね。那で可愛い細い聲をして物柔に、口數が寡くツて巧い言をいふこと、恐るべきものだ。銀貨を見て何處の國の勳章だらうなどと、言ひさうな誠に上品な様子をして居て、書替だの、手形に願ふのと、急所を衝く手際の婉曲に巧妙な具合と來たら、實に魔藥でも用ゐて人の心を痿すかと思ふばかりだ。僕も三度ほど痿されたが、柔能く剛を制すで、高利貸には美人が妙！

那奴に一國を預ければ、輒ちクレオパトラだね、那奴には滅されるよ。」

風早は最も興を覺ねたる氣色にて、

「では、今は其の禿頭は中風で寐たきりなのだね、一昨年から？
うれでは何か虫があるだらう。有る、有る、うれくらぬの女で神妙にして居るものか、無いと見せて有る所がクレオパトラよ。
然し、壯な女だな。」

「餘り壯なのは恐れる。」

佐分利は頭を抑へて後様に靠れつゝ笑ひぬ。次いで一同も笑ひぬ。

佐分利は二年生たりしより既に高利の大火坑に墮ちて、今はしも連帶、一判取交ぜ五口の債務六百四十圓の呵責に膏を取るゝ身の上にぞありける。次いで甘糟の四百圓、大島紬氏

は卒業前うげふぜんにして百五十圓ひゃくごじゅうえん、後に又二百圓にひゃくえん無疵むきずなるは風早ふうさうと荒尾あらおとのみ。

瀛車やうしやは神奈川かながはに着つきぬ。彼等かれらの物語ものがたりをば笑わらまじげに傍聽ぼうていしたりし横濱商人しやうにんていの乗客じやうきやくは幸さいはに無聊むれうを慰なぐさめられしを謝しやうすらんやうに懇ねんどうに一揖いちよくして此こゝに下車げしやせり。暫しばらく話わの絶たわける間ひまに荒尾あらおは何なにをか打案うちあんずる躰ていにて、其そのの目めを空そらしく見据みすゑつゝ漫語まんごのやうに言出いひだでたり。

「其後そのち誰たれも間はざまの事ことを聞きかんかね。」

「間貫はざまくわん一いちかい。」と皺しわ腹聲はらでは問反もんかへせり。

「ね、誰たれやらぢやつたね高利貸アイの才取さいとりとか手代てだいとかして居る」と言うたのは。」

蒲然さうく、那樣話やうなを聞いたつけね然しかし間はざまには高利貸アイの才取さいとりは出来あない。他あれは高利かうりを貸かすべく餘あり多くの涙なみだを有もつて居る